

三河アララギ

平成二十八年

十月号

第六十三卷 第十号



ニューヨーク日記(120) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

Dalí Theatre and Museum

Blue Shoe Diaries



何だか卵が食べたい。もうスペインから帰ってきちゃったけどダリの美術館の建物面白いよねー。NYはすっかり寒くなっちゃったから余計にバルセロナに戻りたいよ～

Craving some eggs... and bread! I'm already back from Spain but I just love the quirky building of the Dalí Museum. Winter is here in NY so I'm wishing even more to be back in warm(er) Barcelona... munching some tapas... dreaming... eating a tortilla...

目次

第六十三卷第十号(通卷七五四号)

表紙・ブーケ	今泉 由利 (1)		
ニューヨーク日記(120)	Blue Shoe (2)		
黄素馨の門	御津 磯夫 (4)		
歌集「はぎくさ」	大須賀寿恵 (5)		
歌集「草々」	今泉 米子 (6)		
空白	岡本八千代 (7)		
東御 <small>とうみ</small>	今泉 由利 (8)		
鎮魂の日	弓谷 久子 (9)		
糸瓜水	内藤 志げ (10)		
田舎の暮らし	林 伊佐子 (11)		
蝸	安藤 和代 (12)		
恨みか愛いか	伊藤 忠男 (13)		
雷鳴	足立 晴代 (14)		
讃えをり	阿部 淑子 (15)		
空に放せり	鈴木 孝雄 (16)		
家計簿	清澤 範子 (17)		
初めての客	白井 信昭 (18)		
簪	森岡 陽子 (19)		
葉月の暑さよ	近藤 映子 (20)		
孝行	杉浦恵美子 (21)		
如雨露	山口千恵子 (22)		
棘	夏目 勝弘 (23)		
歌集「夢のつづき」	水上 信子 (24)		
童謡『ああ武士道』	高橋 育郎 (25)		
『いこよせ』	三田美奈子 (26)		
『いーはとぶ』			

水野 絹子 (26)	水野 絹子 (26)		
規恵 (26)	規恵 (26)		
友江 (26)	稲吉 友江 (26)		
鈴木美耶子 (26)	鈴木美耶子 (26)		
幸子 (27)	吉見 幸子 (27)		
正枝 (27)	牧原 正枝 (27)		
文子 (27)	石田 文子 (27)		
厚子 (27)	森 厚子 (27)		
俊子 (27)	山崎 俊子 (27)		
慶子 (28)	山口 慶子 (28)		
溜里 (28)	岩瀬 溜里 (28)		
里美 (28)	高木 里美 (28)		
安純 (28)	紺野 安純 (28)		
知徳 (29)	清水 知徳 (29)		
幹豊 (29)	小俣 幹豊 (29)		
千遥 (29)	永崎 千遥 (29)		
有里奈 (29)	佛生 有里奈 (29)		
周二 (30)	松本 周二 (30)		
文彦 (30)	米田 文彦 (30)		
皓一 (30)	柳田 皓一 (30)		
正規 (31)	山元 正規 (31)		
京子 (31)	山迫 京子 (31)		
陽子 (31)	森岡 陽子 (31)		
清秀 (32)	田中 清秀 (32)		
善恵 (32)	重野 善恵 (32)		

今泉 由利 (32)	かさね吟行会	
植村 公女 (33)	『酔いの徒然』(54)	
米田 文彦 (34)	本からのあれこれ(11)	
丸山酔宵子 (36)	ある自然科学者の手記(53)	
米田 文彦 (38)	絹の話(71)	
大橋 望彦 (40)	短歌に詠まれた茂吉 六十一回	
今泉 雅勝 (42)	楽しい時間(47)	
鮫島 満 (44)	『歴代天皇御製歌』(六十五)	
山本紀久雄 (46)	『歴代天皇御製歌』(六十六)	
貫名海屋資料館 (48)	『歴代天皇御製歌』(六十七)	
貫名海屋資料館 (49)	『歴代天皇御製歌』(六十八)	
貫名海屋資料館 (50)	植物は何者	
貫名海屋資料館 (51)	『水魚のことから(189)』	
夏目 勝弘 (52)	ことのはスケッチ(453)	
岡本八千代 (53)	編集室だより(二〇一六年・八月)	
今泉 由利 (54)	野菜の花(4)	
今泉 由利 (54)	お知らせ・三河アララギについて	
三河アララギ (57)		
鈴木 孝雄 (59)		
鈴木 孝雄 (60)		

黄素馨の門(昭和四十一年〜昭和四十四年) 御津磯夫

山の霧つねならなくに埋められし黄金の鶏鳴くも鳴かぬも

宝曆の古りたる墓に入りたまひみとせをはやくけふの雨の日

三河鳥羽のみなどの干潮あつくゆく幡頭はづの社をこころにもちて

丹野城山めぐらしてわが祖の一代さかえし趾つちのこりたる

御一新にほろびしわが家をいでましていま国宝の秘佛千手觀世音

語りあふこと多きかなまつよひのしげれる芝に君をかこみて

修理されて藤原の代の色をたもつみ佛の足に眼ちかづく

君が手の一葉よりわが培ひて花ひらく十五夜の月の光りに

ただふたつ下枝にいまだ青かりしポポーはさだめのごとく盗まる

昏れのこる風ある空をめぐりぬし熊野の鳶も見えなくなりつ

歌集「はゝきくさ」Ⅲ

大須賀寿恵

いつまでも鳴き続ける土蛙秋海棠の朱きにすがりて

子と寄りて一つのリングオむきて食ふ未だ青くしてかたしと云ひつつ

ひと畝の紫蘇の葉は色あせ摘まぬ間に夏の休みは終となりぬ

よどめるが如き朱き太陽よ稲村山に今沈まむとする

露草は池のめぐりにはびこりて浮草のごとくたゆたふもあり

硝子戸を開け放ちるわが部屋に露草つたひてトカゲ入り来る

ブラウン管通していで来るわが声よひとりの部屋に顔あからめる

詫びやうと心にきめしあかときに鳩鳴き出でぬ弘法山に

根付きしをくだされし君は病み給ひ木芙蓉は朱に大きく咲き出づ

わが受くる身障者手帖に貼る写真富士山バックの半身えらぶ

歌集 「草々」

今泉米子

暑き日の四五日にして待つ夕べ紫鮮やかに今日の花散る

秋を待つ老の二人にただ広き畳の上に月かげのさす

杳かなる古生代の繁りを想はしむ庭に今年の羊齒のはびこる

野添のみちゆき来に見上ぐわが庭より君に移りし直幹の松

三十年見なれし松の貫はれて掘りあとの土に雨のしみゆく

粉をふきし黒きぶだうを洗ひをり張りつめゐたる心ゆるびて

右肩のつひに痛みて汲めずなり頑かたくなに保ちし井戸のポンプを

メタセコイヤの黄葉の色に染めさせむ年々に思ふ遂に果さず

わが庭のカナリー椰子の太幹の幾ところにも羊齒のやどれる

冴えかへる今朝白妙の白椿鶴首白磁に挿して捧ぐる

空白

蒲郡 岡本八千代

「銷暑」しやうしよとふことは調べて方丈にねころびてをりわれの空白

わが方丈に寝ころびたれば東の窓には淡々あはあはうろこ雲ある

何もかも忘れたるとき心地するうろこ雲はやいづくにか去りて

眼まなこつむりしばらくの間のわが空白いつしか空も蒼あをき空白

届きたる歌集「あなた」を読まむとすま白き表紙に「あなた」の赤文字

一度ひとたびも逢ひて話ししことなきにわたしは「あなた」に逢ひたくなりつつ

何となしに一夜一夜のわたしの夜半思ひの篤き「あなた」に誘はる

今宵の月立待月が西浦の愛宕の山の上に出でをり

ノボタンが咲けば呼びくれる君があるすぎゆく夏のけさの朝かな

ノボタンは今朝けさのひかりの中にしてほのかゆれつつ五弁の紫

東^{とう}御^み

東京 今泉 由利

桑の実なは小さく小さく生りてゐる枝垂桑とふ並木道ゆく

アララギの大木根方に確かなりしがみつゐる蟬の抜け殻

地下茎は如何にかあらむ山々を覆ひ尽くして葛の立花

昆虫の図鑑ひもとくごとくして東御の山に蟲達無限

一二〇〇メートルを登りこし古代紫野薊の咲く

標高は一二〇〇メートル吟ずるは「杜甫」天地万象地球に沁むる

エゴの実の一つ一つに朝の露一つ一つに太陽宿す

遠くの木その次遠くすぐ近く次々消ゆる流るるは雲

青紫蘇の五枚ばかりを摘みにい出先に来てをりヒガシキリギリス

キリギリスのまろき食べあと残る葉よ今日の薬味となりにつけり

鎮魂の日

豊川 弓谷 久子

空爆のあいまを縫ひて逃げのびき我も友も裸足のままで

ふつくらと笑顔やさしき班長さん跡形無かりき空爆のあと

戦争はいやだと身に沁み思ひたり敗戦の日の我が十八歳

我の一人の鎮魂の日なり戦争の悲惨語り合ふ人も無ければ

庭に咲く高砂百合も供華とせむ夫逝きてより二十回目の盆

文庫本読めなくなつたと嘆かれし君の齢を我は越え生く

少しづつ日脚短かくなり来しかミシンの針目見辛き夕べ

夕べ忽ち過ぎしひと日と詠はれしスエ先生の歌なつかしき

草庭に蟋蟀の声合間を縫ひて鉦叩きの声目覚めある夜

ひとときを法師蟬庭に鳴きたつる酷暑の夏も終り近しか

糸瓜水

豊川 内藤 志げ

朝一番小窓大窓開け放ち暑き畳に風を通しむ

切り口より滲み出づるをしばし待ち糸瓜の蔓を瓶に差し込む

糸瓜水彼の友此の友思いつつ滲める滴の育を見つむ

今の朝畑に來にけり糸瓜の水採りゐる瓶の早や温りてゐる

西の陽を案じ出で來ぬ干し物を胸に抱へて窓に涼しむ

竹の葉の茂りを揺らすさらさらとさらさらの風窓去りがたく

放たむと胸の蟋蟀揺らしたり芝生の上まで舞いてゆきたり

明け方より雨との予報を心待ち東の方に雨雲高く

カリカリの葉を切り落し水流す緑り少なし台風未だに

藪の中緑の中に白々と一郡明るく仙人掌の花

田舎の暮らし

岡崎 林 伊 佐 子

村人と助け合いたる若き日の田舎の暮らし今は懐かし

離村して廃家となりし集落が杉の木の間に点々と残れる

田も畑も杉の木立ちに変貌するわが古里も時代の変遷

農耕に休む暇なく働きて健康たもつ老いの倅せ

草取りて暑さをしのぐ茄子のかけ真昼の太陽燦さんと照る

風ふきて枝もみあえる茄子の木の豊作ゆえの実を始末する

終戦後伝染病に逝きませし三十路の母のあわれなひとよ

生きてあらば百才を越すわが母を看取りし戦後の幼な日忘れぬ

子と孫とお盆のみ墓に供花そえて三世帯同居の倅せ告げる

山の上の共同墓地にこの夏は松明たいまつともす村人もなし

蝸

豊川 安藤 和代

幼き日父と遊びし竹島が今も大好き海に来て立つ

ギラギラと波は光りて日に焼けし父の笑顔が蘇り来る

行楽地あまたあふるる今の世にたった一度の父と竹島

朝まだき三谷の海岸釣り人の動せずにて沖船がゆく

陽を浴びて透けし袋をふくらませ梨はゆったり収穫を待つ

どのダムも満さるる程の水のなく雨なき空をじっと見つむる

祇園夜の花火の響き悲しけれ母の忌日のまた巡り来し

母逝きて四十余年よ夾竹桃あの日と同じ白さが痛し

蝸の声聞く夕は父母思う祖父母を思う息深く吐く

吾が胸に位置しめ育ちし孫達に今私が守られてをり

恨みか憂いか

大阪 伊藤忠雄

無限とは生まれて死して引き継がる連なる糸の切れることなく
祭壇に並ぶろうそくお線香煙り揺れるは涙のせいか
提灯の灯りぼんやり部屋内に木魚の音響き染み入る
内水にすだれ風鈴朝顔もとんとみられぬこの頃の町
汗まみれグラウンド走るさわやかさもう味わえぬ擦る膝下
体温を越える気温にこの体どこにおけばと恨み言出る
口開けば暑い暑いという言葉しかでぬか思考の止まるこの夏
移転する先の土壌も汚染あり行く先宙に浮く魚たち
白黒をはつきりさせるが住みやすき国をつくと誰が言うのか
乱れた世時にはこたえ出さずとも行きつく先に明るさあらむ

雷鳴

東京 足立晴代

何事も人手を借りて過ごす日々思わぬ怪我で残念無念

白雲の流れが変わる黒雲に雷轟き雨も激しく

青空に雷鳴ありて暗雲の豪雨ともない川あふれたり

つかの間の晴れ間をまちて干しものを出し入れするもひと仕事なり

梅雨あけて台風続けて到来しあふれる水はいずこへと

吾ながらこの年になりて大怪我に自負せる我おろかなり

過ぎし日の健脚萎^すえて今更に努力努力と励む日々なり

太陽のまばゆき道をひたすらに汗をふきふき歩む我なり

垣根よりこぼれる様にバラ咲きてかわいらしさにふと立ちつくす

八月も半ばをすぎて亡き母の静かに墓参祈る我なり

讃えをり

横浜 阿部 淑子

すばらしき勝利を掴みし選手等は人々のお陰と他を讃えをり

四百Mリレーのバトンタッチは鮮やかに歴史に残る銀に輝く

初診の日即入院とICUベットの上的我に驚く

血圧は二百を越えて心臓は限界だったと医師に告げらる

植え込みしペースメーカー働きて我の心臓生き返りたり

空に放せり

沼津 鈴木 孝雄

人前で感情見せぬイチローの三千本では頬に涙が

今日もまた高温注意報の市放送子供扱い変わらぬ日本

閉館の音楽響く沼津御用邸何故かこの国蚩の光

お盆過ぎ海水浴客疎らとなり沼津御用邸にヒグラシ鳴けり

台風九号被災者にはすまないが野菜にとっては恵みの雨に

パセリ囲うネットでもがくアゲハチョウ手で捕まえて空に放せり

八月入りウリハムシが急に増え虫は季節を忘れることなし

人参の種まき畝に入念に水を撒けどもスポンジの如し

緑色の大きな幼虫パセリの葉に毎日の監視我が目は何処に

一夜にしてシンクイムシに芯食われ順調に育った小松菜処分

家計簿

春日井 清澤 範子

午前六時蝉は一勢に鳴き始む今日も猛暑日クーラーに浸る

堤防の真緑深く沿ひて行くあぶら蝉の大きな合唱

高血圧の夫に塩分控えよと食事の度に言ふは淋しも

蝉の声は日中にして夜聞くは虫の声なり今日よりお盆

眠らむと目を閉じるなり暫らくを明日の家計と故母ははの笑顔と

堤防の夏青草の刈り取られ今日より広く光れる川面

オリンピック日々競技に感動すメダルの数を家計簿に書く

歯を治す夫に味噌漬歯にかたし薄くうすく切りて分けたり

梅雨前線通過す今日の予報台風一号発生のニュース

吾が家は蜂の巣掛かるが多くして門の間を蜂低く飛ぶ

初めての客

豊川 白井 信昭

昼日中さざ波光る裏田より吹き入る風に吹かれて掃除

さざ波の立て光れる水張り田昼の散歩はガード下まで

七夕の織姫と彦星の一度の逢瀬と出で見る夜空は暗し

工廠展七十一年目の事実知るビデオ映像写真絵本など

来場の人はずばらにて立ちしまま二分ほどじっと画面に見入る

惨状を今に伝える数々の絵本と写真とこの胸苦しさ

八月七日午前十時のサイレンに合わせ黙とう穂ノ原に向き

夕方に息子と縁のありそうか若い女ひとり^{ひと}初めての客

幾万の白い花びら満開に命の限りを尽くし咲きおり

今日もまた厳しい暑さ続く中ニオイバンマツリ咲き継ぐ花壇

簪

東京 森岡陽子

バス停の横に置かれたプランター小さなすび実が三つ付く

梅雨寒にい出てゆきたりリオデジャネイロへ必勝誓ひメダルを胸にと

難民は母国を離れ五輪旗に笑顔で行進勝利よ届け

はでやかに群れて花咲く向日葵の裏は地味なり侘しき様に

炎天下向かふの暖簾の下りをり此処迄漂う土用の鰻

蓮の葉は裏に表にそつと揺る日暮に吹く風蕾には優し

雨上り大盛り上がる暑気払い突然現る虹も加わり

富士山を無窮の美だと彼の画伯我もうつとりそを眺めをり

神田川花街渡す柳橋欄干に彫るは芸奴の簪

秋初めまだまだ暑い日溜りも夕べ吹く風さつと抜け行く

葉月の暑さよ

名古屋 近藤映子

初女性都知事誕生の大ニュース七月三十一日のこと

久しぶり雷様の音と雨といくつになっても耳ふさぐ

八月六日九日原爆投下わすれまじ早や七十一年目を

八月九日長崎の原爆投下より七十一年目を迎えぬ

核兵器廃絶をとなえて七十一年の八月九日を迎える

連日の暑さは体温をしのぐもの冷房入れたりお茶を飲んだり

この夏は甲子園野球とリオオリンピックの重なりてテレビ忙し

早くも台風七号は関東北上嵐しの十六日となり

体操水泳卓球とメダルを掛け居る選手の笑顔よ

わが重症筋無症は進みたるか手足のしびれ体のだるさよ

孝行

蒲郡 杉浦恵美子

剪り取りて瓶に挿すしたるベルてっせん我が見るうちに蓄綻ぶ

たった一輪さればこそ愛づベルてっせんひとつのいのちひとりのわたし

この暑さ今日は我が母誕生日大正末の名古屋の何処か

生前に孝行したとは言へねども今はひたぶる母を想へり

孝行をしたとは言へぬされどされど二十三年母を想へり

蒲郡港揚がる三尺玉そういえば施設の父と共に見たっけ

夫と共に西欧旅した日も遠し山鹿灯籠まつり見物

幾重もの輪の人瞬間揺ぎなし山鹿千人灯籠まつり

一斉に巡回せしとききらめきぬ千人踊り子頭上の灯籠

群衆に夫居らばこそこの一瞬山鹿千人灯籠まつり

如雨露

豊川 山口千恵子

仰向きにころがりてゐる熊蟬を拾ひ上ぐればバタバタ飛びゆく

茗荷の葉にすがりつきつつ動かざる熊蟬夏をはや終へにけり

新しきこと何も起こらぬ毎日を暑いあついと過ごしつつゐる

蚊に刺され茗荷を幾つか取りてをり白色淡き花の咲きゐる

わが呼吸に合はせるごとく鳴きてゐる庭の蟋蟀ききつつ眠らむ

こぼれ種より今年も生え来し火花草小さきピンクの花を咲かせり

草花の鉢にかけゆく如雨露の水かすかに音して吸ひ込まれゆく

わが祖母のしたるごとくに素麺の小さき束を盆の仏壇に

北の窓網戸一枚はりかへて清々とせり開け閉めしてみる

あらためて写真に見れば美しきわが畑にも咲く茄子の花々

棘

豊川 夏目勝弘

手袋を通して刺す柵の棘は手に心地よきかな

バラの棘に触れしやいなや指先より花色なせる血の滲みくる

小さくともいと鋭きバラの棘自主防衛と云へるやいなや

クコの木は棘の生えねば実を付けぬ鳥を誘いいざなまた守る棘

人びとに嫌われ増える毛虫どもカッコウのみが捕食するなり

たちまちに松の若葉を食ひつくす松毛虫ども殺の一字のみ

生き物に棘ある種の多くしてされど鳥類に見しことのない

サボテンの棘を削りて食らふのは悲しからずや人間にして

種しゅを守るために棘もつ生き物のいと多くして人間やいかに

レントゲンまたCTスキャンにも映るなき棘を秘めるは人間のみぞ

歌集 「夢のつづき」

水上 信子

なにゆえにこの巨きなるもの造りしかテーベの円柱あまた立つ中

王が神になりたる栄華を神殿にくまなく刻む絵文字美し

ナイル川を見下ろすホテルのテラスにてクレオパトラに擬して佇む

樹も草もついに果てたる砂山に中天の陽は影をつくらず

玄奘が講話をなしし城跡のくずれくずれて駱駝草生う

砂除けのポプラ並木は三重四重に民家を畑地を囲みて立てる

崑崙を遠くに望みたつところ想い思わずこころ無になる

何もかも風が消しゆく諦めを故城に眺めわが影をふむ

ウイグルの子らの顔だち多様なり洋の東西の渾然として

中国の西の果てなるカシユガルの男の顔はアラブに近し

童謡 『ああ 武士道』

高橋育郎 作詩

一 己に厳しく たちむかい

人にはやさしく 睦まじく

風雪道を はばもうと

耐えて忍んで 実をとる

ああ武士道 われらの鑑

二 松はときわぎ 桜花

竹は節々 たおやかに

地には根を張り 支えあう

いとしさ尽きぬ まほろばよ

ああ武士道 われら讃えん

三 己の心を 広くして

小事にまどわず 大事とり

行くべき道を 堂々と

おもいを遂げるが 本懐ぞ

ああ武士道 われら極めん

四 心は熱く 義に燃えて

尚武を尊び 礼を知る

質実剛健 旨として

信義のきずな 和のもと

ああ武士道 われら勤めん

『いよよ中』

(西浦公民館 いーはとぶ)

唐招提寺の「蓮ハチスの花」の香を焚くかほりは吾のひとりの部屋に
穴のあきし麦藁帽子はひっそりと梁にかかりて持主いま亡く

三田美奈子

さんざめく五月雨降り込む三ヶ根の青葉の陰に虫らの命

つゆの雨に軒のつばくろ騒ぎ立つ孵化待つ四つの卵は無事か

水野絹子

熱中症日焼予防を思ひつつ完全防護のわれの出立ち

日の落ちて万歩計持ちて歩く人ら海風の吹くブルーブリッジに

牧原規恵

友逝きて五度目の夏の巡り来ぬ君との思ひ出薄れつつきて

スマートフォン器用に操る八歳よばあばはキャベツを素早く切るよ

稲吉友江

「バリ島」の朝のテラスに本読む夫われは視てをりNHKワールド

「また今度」と友に別れて帰るなり青葉の坂道遠まはりして

鈴木美耶子

駅ビルの窓越しに見る京都タワーほのぼの白く夕暮れの中
幼らは声高らかに我が膝にいとし盛りよわれにまつはる

吉見 幸子

降る雨に傘使はずに参内す古よりの作法受けつつ
巨壁にあかねの雲のさすごとしつつしみ仰ぐ豊明殿を

牧原 正枝

大船に小舟がより添ひ並びたり玄関三和土たたきに親子の靴が
「持ちましょか」階段半ばに若き声「大丈夫です」と吾はホームへ

石田 文子

嫁ぎ来しここ西浦の吾が家へ茄子など持ちて母と姉来ぬ
母と姉帰路に就く頃か雨のきて雷轟く今の夕暮れ

森 厚子

夏まひる白き日傘と白帽子ゆるゆると窓の外すぎてゆく
出荷する紫紺の茄子に埋もれるて拭きつつく夫よせみ時雨降る

山崎 俊子

現代学生百人一首

東洋大学

砂時計上から下へ落ちていき目で見て思う時間の重さ

千葉商科大学付属高等学校三年 山口 慶子

生い先が短いからと甘やかす祖父の財布にうつむく私

東京学館船橋高等学校二年 岩瀬 瑠里

朝焼けの空を見上げてペンを持つ児らの寝息のすこやかなるに

香取郡市医師会付属佐原准看護学校一年 高木 里美

朝露のダイヤモンドを散りばめた野を踏みしめて夏のデッサン

東京都大田区雪谷中学校一年 紺野 安^あ純^{すみ}

公民で勉強している選挙権三年後には人ごとじゃない

東京都墨田区両国中学校三年 清水知徳

刀鍛冶京都に生きる姿見た炎を味方に刀を作る

東京都東大和市立第四中学校三年 小俣幹豊

声持たぬ友との会話手と顔で大きく表現心つながる

東京都東大和市立第四中学校三年 永崎千遥

盆休みお墓参りで思い出す祖父母とかわした最後の言葉

東京都日野市立日野第一中学校二年 佛生有里奈

『俳句』

砂子踏めば夜明けの浜の秋気配

松本周二

肩車して屋根越しの遠花火

ゆづりあふ墓参の人のすれ違い

顔知らぬ祖父の文読む盆会かな

米田文彦

チーズ乗せ焼くズッキーニ残暑の日

秋の夜の酒場の棚に酒と辞書

どしゃぶりに命果つまで秋の蝉

柳田皓一

ぽつかりと白き雲雲秋暑し

新しき花あふれをり墓参

先に詣でし人の花ある墓参かな

山元正規

雨台風靴の中まで濡らしけり

露けしや鶉の来て狙ふ鯉の稚魚

鬼灯をこきこき鳴らして母偲ぶ

山迫京子

草の丈川辺を埋める残暑かな

野仏の頭に留まる秋茜

知らざるも会釈交はして墓参り

森岡陽子

棚経の声一段と路地渡り

雲割れて突如現はる秋の虹

墓参りそつと手向ける般若湯
そよ風に揺るる穂先の蟬の殻
にはか雨上がる草根に虫の声

田中清秀

掃苔の湯気立ち昇る墓石かな
腹みせて命果てをり法師蟬
目の前を掠めゆくなり赤蜻蛉

重野善恵

水引や誰に結ばむ赤小花
醉芙蓉よりはやばやと酔ひにけり
蓮大葉夢と希望をのせてみる

今泉由利

懐かしき机の傷や麦嵐

植村公女

山の子の海の匂ひの昼寢覚

再会のさりげなく置く夏帽子

ひととせのいのちの力蝉しぐれ

腕相撲手首かえすや秋の天

秋天のはじっこらしき子猫鳴く

どこからも山見ゆる居間秋澄めり

薄寒書庫に灯りし豆ランプ

嘶家のベツカムヘヤー秋灯下

かさね吟行会

「迎賓館・赤坂離宮」 八月

米田文彦

暑さも盛りの八月十一日、赤坂の迎賓館に向かった。

今年の四月から通年一般公開されたもので、華やかな正門は見たことがあるものの内部は如何なる様相か、一行十一名、集合地点の四谷駅から歩き始める。

迎賓館は紀州徳川家の江戸中屋敷があつた広大な敷地の一部に明治四十二年に東宮御所として建設、日本唯一のネオ・バロック様式の西洋風宮殿建築である。戦後は国会図書館など公的機関に使用されていたが、昭和四十九年改修されて迎賓館となった。以来、世界各国の国王・大統領・首相などの国賓・公賓が宿泊し、歓迎行事・レセプションなどの外交舞台となった。サミットの会場となったこともある。平成二十一年に本館、正門、主庭噴水が国宝に指定されている。

内部には豪華絢爛たる四つの部屋があり、「彩鸞の間」

は謁見、条約等の調印、テレビインタビュー等に使用される。「花鳥の間」は公式晩餐会の大広間に、「朝日の間」はサロン、表敬訪問や首脳会談に使用。「羽衣の間」では最も豪華なシャンデリアの下、オーケストラボックスもあり、かつては舞踏会場として使用されていた。いまは歓迎行事、レセプションや会議等に使用されている。

当日は事前申込による時間指定を受け十二時に入門する。ここに入るのはほとんど皆初めてである。

正門は遠くからも見える位置にあるのだが、白と金色の高い棒柵越しに前庭が広がっている。この広場には松の木が多く植えられ、本館までは約二百メートルもある。たくさんの蝉が元氣よく鳴いている。

玄関前は歓迎式典が行われたりする場であり、玄関中央の入口屋根には甲冑を形どった装飾が左右対称に広がり、中央には菊の紋章が飾り作られている。

入館チェックはなかなか厳密であり、空港の搭乗検査並みだ。手提げの鞆は中を見られペットボトルもチェックされる。警備の人も多い。

入館者は予想よりも大変多く展示物は人の肩越しに覗き込む感じになった。我々はここで自由行動、時間を決めて噴水の辺で再集合とした。

文月や国会図書館ありし跡
鉄柵の白さ目にしむ秋の空
秋の日に光る門扉の白と金
迎賓館見学叶ひ蝉しぐれ
秋の蝉声の強さを競ひけり
迎賓館の荷物チェックや涼新た
ゆったりと警備員立つ残暑かな
秋扇子たたむ間もなし遊歩道
金風や迎賓館記念切手買う

由利
素山
文彦
善恵
勝信
さち子
皓一
しのぶ
京子

主庭という大きな噴水のある庭は全面砂利敷きで、その廻りには枝振りの良い松が植えられている。また所々に立派な木斛なども植えられている。

迎賓館を出て句会の会場がある四谷三丁目へ向かう。立派な百合の木の並木道ではあるが、皆、句作を考えて

いるのか口数は多くない。いまの時期は夏の真っ最中、しかし、立秋を過ぎているため俳句の季節としては秋、なかなか難しい頃だ。

百合の樹の一葉散りたり並木道
手の届く幹の高さに秋の蝉
陽子
正規

会場は学校だった建物の利用だそうだが、適当で具合が良い。和やかにいつもの通り進行、お開きとした。

■かさね吟行会■

日時 十月十四日(金)
場所 向島百花園
集合 東向島駅(スカイツリーライン)
改札 十一時
申込 森岡陽子宛 (03)3712・2835

『酔いの徒然』（五四）

丸山 酔宵子

『角栄とオーラとオールドバー』

貧より身を立て、小学校卒が「不撓不屈」54歳の若さ
で日本の最高指導者へと上り詰めた田中角栄が、今ブー
ムとなっている。本屋には田中角栄コーナーも設けられ、
石原慎太郎「天才」、早坂茂三「頂点をきわめた男の物語」、
大下英治「田中角栄の酒」など10種類以上の角栄本が並
んでいる。

今から40年ほど前、現在のシネコンファッションビル
有楽町マリオンビルが朝日新聞東京本社であった頃、そ
の当時自民党幹事長であった田中角栄と差しに近い状況
で出会ったことがある。その当時8階にあった朝日放送
東京支社に行くため、エレベーターに乗るべく1階ホー
ルで待っていると、エレベーターが開き、反射的に乗る

うとすると、そこには、新聞テレビで見慣れた田中角栄
が、仕立ての良い紺色の背広を着て、パーティでお酒で
も飲んでいたのか、やや紅潮した顔で秘書一人を従えて
立っていたのである。

体は決して大きくないが、周りに漂う圧倒的な空気を
と何処かで会ったような親しみ易さが交錯し、自然とに
こやかに挨拶を交わしたのである。田中幹事長は7階で
降りたが、体中から発せられる後光の様なものが発せら
れているようで、これが将にオーラというものなのであ
ろうか、この出会いは、今でもまざまざと蘇ってくる。

田中角栄とは全く違ったオーラを感じた人物がもう一
人いるが、それはジャイアントの長嶋茂雄である。最初
に出会ったのは小学生の頃、長嶋が立教から鳴り物入り
で巨人に入団し、大洋ホエールズとの試合後川崎球場の
バックネット裏で、スポーツ記者のインタビューを受け
ているとき、すぐ横で憧れのまなざしで見上げていたの
だ。色白で胸元から胸毛が出ている大男で、体全体から

光が輝きを放っているようだった。あれから40年、長嶋が監督復帰してミラクル優勝後のシーズンオフの平日昼間、長嶋行きつけの田園調布サウナで、二人きりで真つ裸の再会をしたのである。「優勝おめでとうございます」と挨拶すると、いつもの甲高い声で、「・・ヤアどうもどうも・・」。一糸纏わぬ真つ裸でも、40年前と変わらず、より明るいオーラが全身からほとばしっていたのである。

田中角栄といえはオールドパーであるが、何故あれほど愛飲したのか。それは、池田政権蔵相の時、政界の大御所だった吉田茂元首相に接触したいと思い、吉田の側近佐藤栄作に仲介を頼むと、吉田は「ああ、あの山猿か」と応諾し、さっそく大磯の吉田邸に出掛け、贈り物には良寛の書を持参すると大変喜んで、「まあ、飲め」と吉田がすすめたのがオールドパー。それ以来いつもオールドパーを欠かさなくなったとのことである。

オールドパーは、明治維新、岩倉具視が特命全権大使として欧米を視察した際に持ち帰って以来、粹人たちに愛されているが、今宵は、152歳まで生きた実在最长寿者、トーマス・パーにあやかっつて、夕涼みでもしながらオールドパーのオンザロックと行きましよう。

雷鳴が ロックグラスに 響く音

酔宵子

本からのあれこれ (II) 米田文彦

「ある保育園と園長の足跡①」

始まりは第一次世界大戦後の不況だった中でのことであつた。厳しい日々の労働に苦しむ若き母親たちのために託児所を開設、大正から昭和前期、戦前から戦後の混乱期を、一貫して働く母親を支援し続けた女性がいた。

富山県の港町、伏木（現・高岡市伏木）の堀田くにという人である。以下、保育園の記念誌などを見ながらその歩みを辿ってみたい。

その頃の農村は疲弊著しく、生活の糧を得る道は少なかった。その為、一家の主婦たちの中にも伏木港の沖仲仕（荷役）となり、早朝から夜中まで重い荷を担いで働く人が少なくなかった。

しかし、女性にとって港の荷役作業は厳しく、環境も整ってはいない。乳呑児を抱える主婦は倉庫の軒下に子供を寝かせて働くほかなかつた。北国の寒風は容赦なく吹きすさび、寝る子の上に雪が降り積もつたという。

堀田くにとの生家は由緒ある廻船問屋であり、北海道からニシン、昆布などを満載した船が無事に帰り着いた夜は、盛大な宴で町中が沸き返つた。

しかし、その家も国の援助を受けた大資本による船舶輸送近代化の波には抗することができず、斜陽化してゆく。くに三十五才のとき、遂に生家は没落、壮大な家屋敷も最後の持ち船も人手に渡ってしまうことになる。

その頃、伏木の町には工場が出来つつあり、人が集まり、戸数は八百も増えていたという。不況下の農村の人たちが「伏木は景気が良いそうだ、港に働き口がある、何とか食える」と集まつてきたのだ。

大正八年、くには町の婦女会長に選ばれる。産後の床に臥せっている時の欠席裁判だった。

くににとっては我が家が激変している最中のことなのだ。大正十二年に子ども二十人ほどを預かり始めている。石炭の山の間から赤子の泣き声が聞こえる状況を見るに見かねてのことだった。

まず、婦女会の会員に呼びかけて協力を求め、預かる場所は「念仏寺」という生家と関係ある寺とした。

ここは幕末に山岡鉄舟らが身を潜めたこともあるという寺ではあるが、現状は崖下の草ぼうぼうの寺であった。そして、運営には日々の資金が必要となる。

会員は協力して絞り染めや刺繍の内職を引き受け、バザーを開き、催しごとの食事作りなどをして工面をした。しかし、労多くして利益は少なかった。

また、港の朝は早く、荷担ぎは朝五時半には始まっていった。従って子どもを預かる時間もその前から始めざるを得なかった。

苦労が続く大正十四年、たまたま伏木の劇場に「青い鳥」の映画フィルムが売りに出されて来たのを買い取り、婦人会主催の上映会を催している。会員必死の切符販売が功を奏し、まずまずの利益が出た。これを元手に境内に遊戯室を作り、県の認可を得ての開所は大正十五年四月。子どもは約四十名、託児料は無料、一日二回の間食用に三銭を収めさせて保育が始まった。

この年の暮には昭和に改元されることになる。後の人によると、県下では初、全国でも七番目の託児所開設なのだそうだ。

子どもの数は日一日と増え、百人を超えるに至った。

折から、事業奨励の趣旨による下賜金二千円を得、他の慈善団体援助、会員の奉仕活動等により、昭和四年に第二託児所、八年に第一託児所の移転新築がなされた。

このように書くとは大変順調に発展しているようであるが、例えば託児所建築の土地に関しては、資金不足のため土盛りは婦女会員自身が行っている。丘の上の瓦工場から生産過程でロスとなった瓦を貰い受け、大八車に積んで現場までの坂道を必死に運ぶという力技であった。

世の中を見ると殊に昭和初期の農村は疲弊甚だしく、子どもたちの中には空の弁当箱を持ってくるものも多かった。その為、昭和八年に副食の給食に踏み切っている。

この頃には正式に乳児保育を開始、また県の医師を招いて小児健康相談を開始、当時多かつたくる病対策に太陽燈を設置して乳児死亡率低下に貢献した。(相談所は昭和十二年に市に移管) 十五年には婦女の洋裁技術習得のための授産所を併設している。(戦後、婦人会に吸収) そして時代は戦争へと突き進んでゆく。

ある自然科学者の手記 (53) 大橋望彦

『生・若・老・死』

25) 小生と丸さんは不良だった!!

独協高校で、二年生の頃は二人とも所謂その当時の不良学生であった。もう一人、仲間として片山聡君という何でも格好つける少し軽い友人がいた。その片山の家が、中央線の中野駅の北側にあるアーケードを抜け切った所から、右手に少し入った所にあつた。授業をサボつて、彼の家に行き、それから直ぐ近くにある「クラシック」という音楽喫茶店に行った。とても感じのよい店なので、それから後は、その「クラシック」に直行するようになった。

当時の「クラシック」は現在ある店よりも少し北寄りの大通りからちよつと商店街に入った辺りにあり、間口二間ほどの、奥行きが四間位の細長い小さなお店であつた。店の入り口は白のペンキ塗りの洋風ガラス格子の開きドアがあり、その左右にサンルーム式の丸く出つ張った部屋が二つあつた。奥の突き当たりに二台の電蓄（電気蓄音機…レコードプレー

ヤー）が置いてあり、そこより奥の方に、床から天井までびっしりとレコード棚があり、当時としては、他には見られないほどの充実したコレクションであつたと思う。と云うのは、確かお店は正午に開店し、夜九時には、閉店したように記憶しているが、週に二三次は開店と同時に飛び込んだのである。それは、店に入るとまず定席の（店のドアを入つて直ぐに左右にあるサンルーム式の部屋には二つずつテーブルがあつて、それぞれソファと椅子が二つずつ置いてあつた。この左の席が店の中で番音の良い場所であつたのである）左のサンルームにあるソファを確保して、更に、その日のリクエスト曲に聞きたい曲を三曲書き込んだのである。常連が四人ほどいた。一人は年齢が三十から四十代に見えるからに紳士といった温厚な方で、もう一人は、美校の学生さんで、いつも絵をスケッチしていた。彼らも三曲ずつリクエストした。丸さんと小生はそれぞれ毎回リクエスト曲が違つていた。ほかの常連もそれぞれ違つた曲をリクエストしていた。従つて、その後のリクエストは少なくとも十曲目になってしまうので、いち早く書き込むのが先手であつた。店には若くて上品で、とてもステキな女性が一人いて、注文と、給仕と、レコード番を兼ねてい

た。彼女は音を立てない気遣いから常に運動靴を履いていた。レコードは78或いは80回転か、45或いは33 1/3回転のSP盤・LP盤であった。しかも盤を大事にする意味で、レコー

ド針は竹針で、二面毎に専用のカッターでカットして使用していた。それだから結構レコード番は大変忙しい仕事であったに違いない。彼女は注文、給仕を終えると、電蓄の直ぐ横に静かに座っていて、レコードの終わりに近くなると立ち上がり、盤をひっくり返すと直ぐに針をカットして、続きを手早く掛けるのである。また暫しじつと横に座っているのがある。新しい客が入ってきて、この二連の操作は最優先であった。流石は音楽喫茶であった。当然ながら美校生は彼女のスケッチを良く書いていた。正午に飛び込んでから閉店までコーヒー一杯で粘ることがしょっちゅうであったが、別に文句を言われたこともなく、常連は皆そんなものであったのであるが、今思うと良き時代であったと尽々想われる。

中野の「クラシック」はかなり早い時代で、それから後になると、神田の「田園」「エンペラー」、新宿の「田園」「でんえん」「らんぶる」等々沢山音楽喫茶が出来たが、何れも喫茶が主体であるか、ケーキが主体となっていて、「クラシッ

ク」の形態は他では見られなかった。それから直ぐに歌声喫茶がブームとなって、音楽喫茶店は益々少なくなってしまうた。

学校をこれだけサボったのだが、別段問題にされた覚えも無いのが不思議だし、ちゃんと卒業も出来たのだから不思議でもある。尤も、「クラシック」では音楽を聴いたが、時には居眠りもしたし、小説を読んだり、宿題を適当にこなしていたことも事実であった。宿題の分らないところは丸さんとひそひそ声で教え合ってもいた。流石に三年の受験時代に入ってから、この「クラシック」通いも終わってしまった。

ずっと経ってから懐かしく思い、訪ねたところ店の場所も変わっていた、「クラシック」の名前とレコードの数は前のようだったが、雰囲気は他の音楽喫茶と同じような雰囲気となり、地下二階、二階建ての店と大きくなっていた。確か開店五十周年記念とか言っていたように覚えている。もうそれから彼れ此れ十余年経ってしまった。今はもう無いのだろうか。

絹の話 (71)

「アトリエトレビ」今 泉 雅 勝

絹の販売現場質問特集

絹の販売現場にいるとお客様から色々な質問が来ます。
多い順に列挙してみます。

洗濯はどうしたらよいですか?.....前号既述
アイロンをどうかけたら良いですか?...前号既述

生糸の絹と紬、紡ぎの絹とどう違いますか?

接客者の約半数の方がこの大きな違いを理解していません。これはデパートなどで接客し始めた頃はショックを受けた様な驚きでした。この様な絹の加工形状の差異は軽重も艶、触感も見た目にも明らかに大きな違いがあるのに「絹」と云う表示だけでそれがどう違うのか詮索する人は意外に少ないようです。

この事が解らずに高い和服などを平気で購入する女性の気持ちは40年近く野蚕絹取り組んでいる私には現在も理解出来ません。そこで昨今では売場に必ず各種の繭見本や真綿を展示して、この様な質問のお客様に繭を見せ

ながら手短かに糸の作り方を説明します。

生糸を使った薄物の説明は「お湯の中に繭が三つ浮いています、湯気と一緒に上がって来た三本の糸口を引き揃えて、少し撚りをかけながら巻き採ったものを生糸と言います。これが糸と云う字の始まりです。現在では7本又は10本でとる事が多いです。

この作業を製糸と言います。

お湯の中には蛹が透けて見える程度の袋状の物が残ります、これらは短く裁断されて綿と同じ様な方法で工場生産されてつむぎ糸になります、これを絹紡糸と云います。蛹が出た出殻繭などを真綿状にして手でつむいだ物や、軟らかくした繭からを直接引き出した糸にした物を紬糸と言っています。

だから正式な場所につむぎを着て行く事を控えるのが常識です」とこんな風に手短かに答えます。この説明もせいぜい1分以内が限界です。

これ以上長いとお客様はこちらの説明など、うわのそらで、もう別な物を見えています。

商品表示は生糸であろうがつむぎであろうが「絹」としか表示は許されませんので、お客様は混乱するのです。

それではつむぎが高いのはなぜですか?

と二の矢の質問が来る事があります。「手をつむいだ物は大変な時間と経験的労力がかかっていますので、一般的に材料費と云うよりも人件費です、有名な人の作品はさらに高価になります。人件費の安い海外製なら品物の割に安い物もあります。一般的にはたて糸に生糸、よこ糸につむぎ糸の織物が多いです。絹 \times %と云う表示の絹（長繊維）は絹を細かく切って短繊維（綿など）にして混紡又は合糸されている物です」と二問目の答えは先の半分以下の時間で答えねばなりません。

この素材は麻ですか？

精練された生糸で織られた少しシャリつとした品物を手にして、これは麻ですかと質問する人は少なくありません。「これは絹です」と答えると、「エー絹つてもっと軟らかいものではないですか」と戸惑いを隠さない人がいます。この質問を受けるといつも悲しい絹の歴史が思い出されます。

日本では数十年前までは日本のあらゆる所で養蚕が行なわれていました。繭を出荷する前に繭の外側のふわふわしたケバをむしり取ってココココした誰もが知っている繭にします。残されたケバを農家の婦人は夜なべしながら糸をつむいで家族の着物を織った長い過去がありま

す。特に水田に不向きな地域は繭生産にしがみついておりました。繭は換金する物で自家消費する物ではなかったのです。ですから一般の人は絹といえはケバや屑繭の軟らかいつむぎの感触が父祖から伝わる脳裏に刷り込まれているのではないかと思われま

す。江戸時代以前は権力者の為に（奢侈禁止令等）、明治以後は外貨を稼ぐ輸出品として繭生産に駆り立てられました。庶民には絹を着る機会が殆どなく、サラツとした生糸の絹にはなじみがないのでしよう。

生糸は出来たときは麻糸と間違えるくらい固くてシャリシャリしています。それをなんぶ練りにするか（お米でなんぶづきにするかとよく似ている）で軟らかさの性格が違って来ます。オーガンジーの様ななればシホンの様にもなります。また撚りのかけかたでも糸の性格は幅広く変化します。

絹は洗ひ方にもよりますが一般的に経年変化して、少しづつ軟らかくなつて来ます。

この様な調子で接客していると、女性ばかりでなく男性も、今日はこの売場に立ち寄つて本当に良かったと言つて下さるお客様もいて、疲れがなおります。

サービスとは金銭ばかりでない事を痛感します。

短歌に詠まれた茂吉

—あるいは茂吉を詠んだ歌人— 六十一回

「月虹」 鮫島 満

十七 鹿兒島寿蔵 5

鯛さげて遠く訪ひたりし拙さを思ひいづるに胸のへ
いたむ 『練馬』 昭和四十六年

歌の註に「佐渡より大石田へ」とある。茂吉が大石田に住んだのは昭和二十一年、二十二年のことであり、作者はそこへ訪ねたのである。旅先の佐渡から鯛を土産に持って訪ねたということになるが、実に不思議なことにこのことが茂吉の日記に記録されていない。しかし、たとえば、宮中歌会の選者になった茂吉から「助手」になることを依頼されていたから何回か大石田に足を運んだことは確かなのである。

右の歌は、長旅をするのに生ものの鯛を土産にした不注意を後悔しているのであろう。このように詠むということは鯛は腐ってしまったのかもしれない。

吾が裡にて茂吉まなべといふ声す教へたまひし日も
はるかにて 『古代祭場』 昭和四十八年

茂吉大人の御手蹟さはに蒐めありかくてみたまのとはのしづまり

題詞に「上山市にて」とある。茂吉の生家跡や斎藤茂吉記念館を訪ねた時の作であろう。一首目は、茂吉に教えを受けて数十年にもなるのにまだ茂吉に学ぶべきことが尽きないという思いを詠んだものである。二首目は、記念館ではさすがに茂吉の手蹟が多く蒐集されていて鎮魂の場にもなっていることだということなのである。

焼跡にわづかに残る浴室にしばし対座をゆるしたま
ひし 『花白波』 昭和五十年

青山脳病院と茂吉の自宅（童馬山房）は、大正十三年の失火、昭和二十年の東京大空襲によって二度全焼している。この焼け跡のことは茂吉自身はもちろんのことアララギの歌人も多く詠んでいる。東京大空襲の時は茂吉は山形に疎開していたから右の歌は大正十三年の火災後の作であろう。わずかに残った風呂場を書斎代わりになっていた茂吉を詠んでいるのである。

てのひらをひろげつつめて思ふなり宙に指もて文字
書きましし 『やまぼこ』 昭和五十一年

茂吉が歩きながら宙に指で文字を書いていたことは何人もの人が詠んでいる。寿蔵が「目のまへに宙に指もて文字書ける大人を仰ぎし日もはるかなり」（『青墨』）と詠んだことは本誌の前号でも紹介した。

花のときすぎてしろじろ髯なびく翁草には君しおも

ほゆ

同

翁ぐさ長き白ひげもてりとふ聞けば御霊の在りど思
ほゆ 『白と杵』 昭和五十三年

翁草は茂吉が終生好んだ植物であり、わざわざ山野の群落を見に行ったり、身近に植えて觀賞したりした。全体が長い毛に覆われており、さらに花が終わると実を覆う毛が風になびくところを好んだようである。

二首目は、翁草が白いひげを生やしていると聞けば、髯を生やしていた茂吉の霊の居所が想像されるといえるのである。

雪溪の縦横の筋さやけき上の山びとは茂吉晴とい

ふ

同

夕つ日の茜なびける遙けさよ蔵王の山は茂吉大人の
山

題詞に「蔵王山即詠」とある。蔵王山は茂吉が幼い頃

から仰いでいた山であり、山頂には「陸奥をふたわけさまに聳えたまふ蔵王の山の雲の中にたつ」（『白桃』）を刻んだ歌碑が建っている。

一首目は蔵王山の「雪溪の筋」がはっきり見える日のことを茂吉の故里の人は「茂吉晴」呼ぶというのである。二首目の「夕つ日の茜なびける」は夕茜雲、またはそのように見える空のことであろう。

茂吉は昭和二十五年に毎日新聞社主催日本観光地百選で蔵王が第一位に選ばれたことを喜んで、

万国の人来り見よ雲はる蔵王の山のその全けきを
とどろける火はをさまりてみちのくの蔵王の山はさ
やに聳ゆる

と詠んだ。のちに『つきかげ』に収録されたこの歌は蔵王温泉のダリア園内に歌碑として建てられた。寿蔵の歌はこれらのことも念頭において詠まれたのであろう。

鴨山の峯をまむかひに見るところ寺が原は歌碑の鎮
まるところ 『朝と夕』 昭和五十五年

下句の「歌碑」は大著『柿本人麻呂』を著した茂吉の「人麿がつひのいのちを終はりたる鴨山をしも此所と定めむ」（『寒雲』）のことである。ここは今は鴨山公園となっている。

楽しい時間 47

山本紀久雄

2016年8月31日

書を眺める

筆者は山岡鉄舟研究会を主宰している。毎月、第三水曜日に上野公園内の東京文化会館で18時30分から20時まで例会を開催しており、熱心な鉄舟ファンが参加されている。

この例会時に、時折、鉄舟が書した掛け軸、巻物等を⁽²⁾持参され、その書の解説を依頼されることがある。また、ホームページにも、時に、鉄舟書の写真を送られて来て、その解説依頼が届くこともある。

鉄舟は生前、書を大量に書いた。生涯でどのくらいの枚数を書したのか。鉄舟邸の内弟子であった小倉鉄樹が著書『おれの師匠』で次のように述べている。

「明治十九年五月、健康が勝れぬ為、医者⁽³⁾の勧告で『絶筆』⁽⁴⁾とって七月三十一日迄に三萬枚を書き以後一切外部からの揮毫を謝絶することが発表された。すると我も我もと詰めかける依頼者が門前市をなして前後もわからぬので、朝一番に来たものから順次に番号札を渡した云ふことだ。(明治十九年六月三日東京日日新聞) 其後は唯だ全生庵から申し込んだ分だけを例外としてみたが、其の例外が八ヶ月間に十萬千三百八十枚(この書は全生庵執事から師匠に出す受取書によつて知る)と云ふから驚く」

「或る人が『今まで御揮毫の墨蹟の数は、大変なものでせうね』

と云ふと、『なあに未だ三千五百萬人に一枚づつは行き渡るまいね』と師匠が笑われた。三千五百萬と云へば、其の頃の日本の人口なのだ。何と云つても、桁はづれの大物は、ケチな常人の了見では、尺度に合わぬものだ」

「師匠の揮毫数は實におびただしいものだ。一日に五百枚でも千枚でも忽(たちま)ちに書いて仕舞ふと云ふことを書いて、當時の書家長三州が『そんなに書けるものではない』とどうしても本當にしなかつたが、後に事實であるのを知つて舌を巻いて驚いたと云ふことだ。

師匠は此の事をきいて『そりや長さんは字を書くのだから骨が折れるが、おれのは墨を塗るのだからわけのない話だ。』と言つたさうであるが、晩年の病身で、一日五百とか千とかの墨蹟をのこすのは、やはり劍禪で鍛へた賜で、かうなると隠居藝ではない」⁽⁵⁾ こういう実態であるから、世に鉄舟書を所蔵されている方や団体は多く、山岡鉄舟研究会に持ち込めば、鉄舟書の解説などは朝飯前だろうと、気楽に依頼してくるのだと推測するが、実は、これは大難題である。

さらに、鉄舟は異常なほどの速筆で、書生が紙を取り替えるのが間に合わなかつたくらいだったといわれる。しかし、一枚ごとに必ず心の中で「衆生(しゅじょう)無辺(むへん)誓願度(せいがんど)」と唱えながら揮毫したという。このような書き手を現代で探すのは困難ではないだろうか。

「衆生無辺誓願度」とは、禪の四(し)弘(ぐ)誓(ぜい)願(が)ん(の)のひとつである。四弘誓願とは、すべての菩薩が共通して発する四つの誓願のことで、衆生を救おうとする衆生無辺誓願度、煩惱を絶とうという煩惱無量誓願断、すべての教えを学ぼうという法門無尽誓願知、最高の悟りに達しようという仏道無上誓

願成の総称である。

鉄舟は、「衆生無辺誓願度」を唱えることで、「世の中の全ての人達を私が誓って救います、あの岸へお移しいたします」と一枚の書に向かうたびに誦経したのである。

つまり、これは祈りともいえ、鉄舟書は無心精神に基づく根源的なのちの発動からの「宇宙書」であり、「一般人にはとうてい解読できない。解読できる人物は限られる。多分、日本中で数人だろう。鉄舟書の一例を示したい。

この書は、平成20年（2008）9月～12月、ロンドンのヴィクトリア&アルバート博物館で開催された鉄舟書展に掲示されたものである。この書展は、安政5年（1858）に徳川幕府と米英仏蘭露の五カ国が修好通商条約を結んで150年に当たるのを記念して行われた。

さて、皆さん、左写真書をすらすら読めますか。私はできません。

ところで、先日、橋本麻里さん（美術ライター）が次のように語っていたので紹介いたします。（2016.8.6日本経済新聞）
「たとえば伊藤若冲の絵の前に立ったとき、私たちは描かれた主題や美術史的な背景を完全に理解していなくても、全体の構図を眺め、そのバランスや色彩の調和、あるいはモチーフとなっている動植物がどのようにフォルムされているか、そうした描き方を通じて絵師は何を表現しようとしているのか、自分なりの感想を持ち、好き嫌いや出来の良し悪しを判断することができ



ところが絵画や彫刻を熱心に見ている観客

も、書に對すると、突然それができなくなる。私たちは実生活のなかで、日々文字に親しんでいる。だが相手が毛筆の書+変体仮名となると、途端に読解の歯が立たなくなる。

絵画や彫刻についてなら、わからない部分があつてもそれはいつたん棚上げにして、『わかる部分だけ楽しむ』マインドになれるのに、こと文字が相手となると、使いこなしている道具が一転して自分に牙を剥くように感じられるのか、『読めない』だけで心のシヤッターを下ろしてしまふ人が少なくない。

ところが、五島美術館所蔵の『高野切』を見ていた時のことだ。高野切とは現存する最古の『古今和歌集』の写本の通称。麻紙に雲母砂子（きらすなご）を散らした料紙に、2文字以上を続けて書く連綿体で歌を散らし書きした、平安時代のかなの最高峰とされる作品。

この作品の前で、私は一人の人間の『声』、もつといえは『歌』を聴くような気分になつていた。読み書きのできない外国語でも、それが音楽に乗ると、胸に迫るような感動を覚えるのと、似ているかもしれない。より視覚的な鑑賞に立ち戻れば、いきなり『読む』ことを求めるのではなく、『眺める』だけでも、かなり濃厚に速度などを意識しながら『眺める』だけでも、かなり濃厚に書を味わえる。食わず嫌いはもつたいない。ぜひ絵や彫刻だけでなく、書にも箸を伸ばして、味わってほしい」

これに接し、ようやく心が落ち着くことができ、今は橋本麻里さんが主張する通り、鉄舟書を「眺める」ことで楽しんでいる。最後に、ヴィクトリア&アルバート博物館の鉄舟書解説の中で、次のように解説説明がありましたので、「ご参考までに記します。『自然の風月情尽きること無し 鉄舟居士書』」

「歴代天皇御製歌」(六十五)

賈名海屋資料館

「後柏原天皇」第百四代・在位一五〇〇年(三十七歳)・一五二六年(六十三歳)

後柏原天皇は、後土御門天皇の第一皇子。皇室の窮乏は、即位式を挙げられず、二十二年後に即位の式がおこなわれた。

祭事、朝儀の再興に努力を続けられた。生涯に詠まれた「列聖全集」に、三千七百余首。

花 色も香もおもひのほかの花をこそよもぎ^{むぐら}律のかけにても見め

初恋 物ぞ思ふ月の初夜のはつかなるおもかけしたふ雲のはたてに

山路旅行 こし方のせめて見ゆやと行く先にあらぬ山路をよぢ上りつゝ

述懐 うき事を誰かまさると世をばたゞひとりぐゝの上^まにこそ見め

寄国祝 この国の日の本さしてあふぐなり高麗^{こま}もろこしの遠つ人まで

「歴代天皇御製歌」(六十六)

貫名海屋資料館

「後奈良天皇」第五代・在位一五二六年(三十一歳)・一五五七年(六十二歳)

後奈良天皇は、後柏原天皇の第二皇子。この御世、皇室の財政が極悪状況にあり、即位の大禮は、北条氏らの献金によった。天文九年(一五四〇)悪疫の流行に際し、「般若心経」を書写され、諸国の一宮に奉納、祈願された。後奈良天皇は、和歌詩文にすぐれ、日記は「天聽集」と現存している。

戦国時代への突入期であった。ポルトガルの商船が種子島に漂着して、日本にはじめて鉄砲を伝来。六年後の天文十八年には、フランシスコ・デ・ザビエルが鹿児島に来て、キリスト教を伝えた。

神祇(大永元年)

宮柱朽ちぬちかひをたておきて末の世までのあとをたれけむ

独述懐(享祿二年)

愚なる身も今さらにそのかみのかしこき世世の跡をしぞ思ふ (後奈良院御製集拾遺)

田家秋夕

夕つゆの外面にひろき千町田(ちまちだ)のをし(稲)ねいろづく秋やさびしき

「歴代天皇御製歌」(六十七)

賈名海屋資料館

「おほぎまち正親町天皇」第百六代・在位一五五七年(四十一歳)・一五八六年(七十歳)

正親町天皇は、後奈良天皇の第一皇子。近世江戸時代となる。

桶狭間の戦があり、織田信長が今川義元を破り。信長の皇室尊崇に支えられ、朝廷の経済的極貧が救済されることとなる。信長の、皇居造営の志は、次の豊臣秀吉に受け継がれた。秀吉は、天皇から従一位関白の位を任ぜられ、伊勢神宮遷宮の旧式を復興した。

あはれ 叢螢

しげりそふ草の葉がくれ飛ぶ螢露にひかりのみだれてぞ行く
秋夕

それとなくすすろに物のかなしきは色かはりゆく秋の夕ぐれ

(豊臣秀吉参内、正親町天皇、秀吉の眺めし桜花の枝に結び)

立ちよりし色香ものこる花盛りちらで雲るの春やへぬべき

(秀吉返歌)

忍びつゝ露と共にながめしもあらはれにけり花の木のもと(川田順「戦国時代和歌集」)

(正親町上皇、短冊に書きて秀吉の許へ)

萬代にまたやほよろづ重ねもなほかぎりなき時はこのとき

(秀吉返歌)

言の葉の浜のまさごはつくるとも限りあらじな君がよはひは

「歴代天皇御製歌」(六十八)

貫名海屋資料館

「後陽成天皇」第七七代・在位一五八六年(十六歳)・一六一二年(四十一歳)

後陽成天皇は、正親町天皇の皇子誠仁親王まことひとの第一皇子。天皇即位の直後、豊臣秀吉は、太政大臣に任ぜられる。

後陽成天皇の行幸を仰ぎ、徳川家康以下諸大名を会し、朝廷を尊崇すべきを誓はせた。

後陽成天皇は、和漢の学に長ぜられ、活版の伝来を機に、「古文孝経」「日本書紀・神代卷」「職原抄」などを刊行され、近世の文運興隆をなされた。

天皇の弟、八條宮親王によって「桂離宮」が営まれた。

伊勢

月よみのみことかしこみ久方の天照るかみやあまくだりけむ(後陽成院御製詠五十首)

寄社祝

天てらす神のいがきのすゑとほく治めしるべき世をや祈らむ

寄日祝

日にそへてたゞしき道の嬉しさはつゝむ袖なく國ゆたかなり(後陽成院一夜百首)

御辞世

憂き秋の蟲の鳴く音のあはれをも今身の上にとぞ思ふ(元和三年文月の記)

植物は何者

夏目勝弘

温度計を腰に付けての庭仕事、熱中症注意のプザーが鳴りつつけている。

バラに触れたのか指先から花と同じ色の血が滲み出てきた。とりあえず休むことにし、指を舐めながら木陰に逃げ込む。

長い間庭木や草花と付き合ってきた、このころ思うことは、植物の持つ力その不思議さである。百坪もない屋敷で完全に土の出ている所は少ない。

草掻きで少し深めに草を取り柔らかくなった所は、待つていたとばかりに野良猫が尿をする。自然と除草剤に頼ることになり、花などを植える少しばかりの空地は手で抜く。

双葉のうちには抜き取ると、二日三日のうちには新芽が出る。忘れてしばらく取らずに置くと、新芽もあまり出てこない。連絡しあっているのかと思うことがある。

土地というものは植物が地主であり人間が後から勝手に自分のものにした。

休眠種のコハコベラで六〇〇年、シロザで一七〇〇年前のものが発芽したとある。

タンポポなど根を切っても切れたつから再生する。繊維根のヒゲ根の総延長は、カラスムギは五五〇km、直根型では地中五〇、六〇cm、スギナなどは地下一m以上になる。(主張する植物・塚本正司著、八坂書房より)

どのようにしても植物には勝ない。地球の最初の主である。必要な所の草木は取らさせてもらい、共生してゆくことしかない。

植物には棘のあるものが多い、なかでもバラの棘が特に鋭い。サボテンなども全体を棘で武装している。人間は棘を削り食べてし

まう。

つきることのない人間の欲望は、品種改良でバラは二百種以上、チューリップなどはどのくらいあるのだろうか。

人間にもトゲがある。例えば、トゲを含んだ目つきとか、トゲのある言葉など、目に見えない鋭いトゲを隠し持っている。

レントゲンでもCTスキャンでも見ることでできない、厄介な代物である。

トリカブトを始めとして、植物にも毒を持った種が多い。モウセンゴケのような、肉食の植物も多くあり。学校の裏山にモウセンゴケの群生地があり、アリを捕え持つて行き、あのネバネバのある葉の上に乗せたことをふと思いついた。

植物・動物・昆虫・菌類等々、生物には、棘や毒や種を守るための知恵がある。

植物は「動けない」ため、蜜を与え花粉を運んでもらう。ランの一種マルハナバチオリーブは形や色だけではなく、ハチの体毛まで似せ、雌が発散する同じ匂いまで分泌する。

ハチの雄はその匂いに誘われ交尾しようとし、体に花粉を付け隣の花へ行き受精の手助けをする。ハチにはなんの見返りもない。詐欺師のようなランもある。

今までも植物とは「動かない」それから「感覚をもたない」等植物に対しての偏見の見方をしてきた。

植物にも感覚があり、コミュニケーションを行ない(植物どうしや動物とのあいだで)眠り記憶し、ほかの種を操る等植物は知的な植物でもあることを知る。

人間の止まることのない欲望によって、自然界は破壊されつつげている。今年の猛暑も人間の尽きない欲望のなせる業。植物が絶滅すれば、火星のような赤い星になってしまう。

「氷魚」のことから (189) 岡本八千代

今や、リ・オ・リンピックのまっ最中。そして甲子園での高校野球のまっ最中。テレビでしか観ることのできない私だけれど、この老いらくの心は、深く動きつめ——。

体操の内村航平選手は、常に「美しい技にこだわる」と言っていた。また、柔道選手も「美しい技で勝ちたい」と言っていた。

漱石と子規のことを書くとうとして、ここに「漱石と明治文学」の一冊をひもとく。著者は、名古屋大学の教授であった、近代文学の研究者助川徳是先生の本である。(実は私、近代文学会に入会させていたとき、助川先生に師事していた)

その本のあとがきに

「漱石文化の総体を論じることで、私自身の生きがたかった戦後に統辞を与えたいし、一方で文学表現の機微に分け入って、私自身の方法の上に立って、表現技法の歴史的展開をあとづけてみたい。技法というのは言語表現にとつて、単に末葉的な技術や手段ではなく、精神そのものに深く関わったあるものだからである。美しい魂なしに、人は美しい言葉を語ることはできない。と、あった。

「美しい魂」と「美しい言葉」の関連にいまさらながら感動したのだ。そして、短歌を創る自分の心に反省をした。

子規の「七草集」について

漱石は、明治22年9月、房総紀行の漢詩文「木屑録」を脱稿して子規に示した。これは、子規に見せる事を目的として書かれたものだった。なぜなら、子規に刺激されて書かれたものだった。

その刺激とは何だったろうか。子規は明治21年の夏(7月9日)、「無可有洲 七草集」というものを草したことにはじまる。それを自ら浄書して知友間に回覧させて、感想を書かせたりした。もちろん漱石にも書かせたのだった。

子規は、学校の夏季休暇中、三並松友(良) 藤野古白(潔)と三人で、向嶋須崎村の長命寺境内の「月香楼」に寓した。二人の相次いで去った後も、なおここに留つて筆を執つた。

「七草集」というのは、秋の七草によつて名づけられた。

・蘭之卷—漢文 ・萩之卷—漢詩

・女郎花の卷—和歌 ・芒のまき—俳句

・朝顔の卷—謡曲に擬したもの

・葛の卷—向嶋の変遷を地名研究したもの

・撫子の卷—在原業平、梅若丸など、墨田川に関する伝説

中の人物を題材に採つた小説風なもの

「七草集」の内容からして、子規の文学的感興がかなり多方面に動きかけていること。また、向嶋仮住いを中心として題材を近いところに求めようとも思っているらしかった。

(柴田宵曲著「正岡子規」参考)

ことのはスケッチ (453) 今泉由利

「詩吟修得合宿」

訳知らぬまま「家元制度」の「詩吟クラス」の末端の「教場」に潜り込んでいる。

先生と生徒三人。あまりに「心許ない」と他の教場から援助参加をして下さって合計六人。

発声練習と、今までかつて「こんな大きな声を張りあげたことはない」と思いつつ、漢詩というを知りはじめているところ。

毎夏、長野の山荘に籠られるという先輩。「置いてきぼりにしないで下さい」とばかりに、彼女を別荘まで追いかけてゆき、三日間の「詩吟合宿」と相成る。

まず初日、上野近くに住んでいて、ほとんど毎日通っている上野駅なのに、新幹線の乗り場所が見つけられない。とにかくわかり難い。はやばやと上野遭難。常々、一人旅に慣れているから何が起こっても自分の範囲だけれど、今回ばかりは団体行動だから、あせる。ようやく東京駅で乗る…大宮で乗る…詩吟クラスの皆と二緒になれた。

せっかくの同じ方向なのだから、まず「上田城」を訪ねる。上田駅、全員の荷物をロッカーに詰め込む共同作業より開始。

私にとって上田とは、上田紬ツツ、蚕都上田さんと。はじまりは五〇〇年を越え、生糸に適さない屑繭を真綿にし、それを細いだ糸糸で自在に織る。上田紬を有名にしたのは、真田昌幸、幸村父子。「真田も強いが上田(紬)も強い」と。学生時代にここに来たはずなのに…こんなではなかったと思ってしまう町の様子だけれど、大きな道路の両側に、並木となつて植えられている＊枝垂桑がうれしい。蚕がすすく育ちそうな、やわらかくおいしそうな葉、小さな小さな実も成つていて。もうすぐ人間にも美味しく実るだろう。

むかし、祖父が聞かせて下さつた、真田十勇士の活躍が、おぼろおぼろにのみがえつてくる。

お城、堀、石垣、櫓、駕籠、鉄砲、人と人と殺し合った武器…いろいろなことが、時代が。覗き穴、覗き窓、恐しいことはぬきにして、覗く景色のおもしろさ、ひと味異なることにはうれしくなった。

櫓のすみつに、古びて毀れた鱗をみつけた。元文元年と書かれる。元文とは桜町天皇の年号、幕府では八代將軍、徳川吉宗の時代。いまから三百八十年前の作品。可愛らしく、ユーモラスでありながら上品で、いったい誰が作ったのか。抱いて帰りたい衝動にかられる。

そして、後に上田藩主となつた「松平氏」のこと。私の生まれた三河に在住した松平宗家(後の徳川氏、家康より四代前)分家独立。上田藩主としての七代の間には、ペリー来航。幕府の老中を勤めた。今から六〇〇年前、三河は、徳川三〇〇年

の礎となった松平氏発祥の地。

みかわに、「松平姓」は名のらず、「平松姓」となつて今も「祖」を守る人が多くいることを思い出した。

上田城跡、この近くの牧場からの牛乳でできた「ソフトクリーム」をいただく。やさしい美味しさに驚く。沢山歩き、沢山詰り込んだ疲れは吹きとんだ。

上田駅から、いよいよ「しなの鉄道」に乗る。地図でみると、千曲川に添うかたちで運行されている。電車の窓から、千曲川が見えるだろうかとキョロキョロする間に目的地、無人の駅に着く。備えつけの箱に、乗ってきた切符を入れる間に、「お待ちしておりました」とタクシーに立派に迎えられた。

いよいよ先輩の範囲に分け入ったことを知る。

車は走り出すとすぐ、稲穂を垂れはじめた田んぼ。巾の広い階段を登つてゆくように、ひと田んぼ、ひと田んぼ……ぐいぐいと山に登つてゆく。リンゴがなつているリンゴ畑。とうもろこし畑、キャベツかな。白土馬鈴薯かな。クルミの木があちこち、初々しいイガイガの栗。上田でそうであったように桑の木がめだつ。アララギの木に赤い実が透き徹る。

作物の景色に感嘆している間に、両側からの木々草々にかこまれて、木木深くのトンネルに入つてゆく。どんどん狭く急坂となり、道が終る所。グリム童話に入り込んでしまったかの。

先輩の山荘。ここにて合宿させていただく。

見渡す限り山山山山。私達以外の人影、家影、何もなし。

ただただ、今の季節の木々に覆われているばかり。空気が美味しい。水が美味しい。心が優しくなつてゆく。

土より生える草の上で、バーベキューを。この土地の牧場の肉、この地の野菜達は、カボチャ、パプリカ、アスパラガス、ナス、ネギ、ズッキーニ……残り火でサツマイモが焼ける。この地のビールでいただくのだった。

一階の居間は、三階まで吹き抜けていて、この深い山の中で、最先端の生活が出来る。此処は天国と表現するのがあつている。

来客用の二階の部屋に二人、別棟の家に二人、居間の横の和室に二人。皆、それぞれの部屋があり、戸を閉めれば二人になれ、戸を開けて、皆緒になり。

台風が来るといふ星のない夜、家の電気を消すと、もう明るさは何もない。このまっ暗闇、厚みというか深みというか純粹の黒。今まで二度も味わたつたことのない、純黒のなかで、何も見えないことを知る。黒が好きだから、すっかり黒につつまれて、安心しきつて眠つた。

土釜で炊いて、少しおこげのあるご飯と、しっかりと出汁の、豆腐のおみおつけ、サラダの朝食が済むと、いよいよ漢詩吟の時間です。ひと匙づつ、カリンあめをいただいたのはいつもとちがう朝でした。さあ良い声がです。柔軟体操、ストレッチをして、発声練習もあり、準備はOK。

『岳陽楼に登る』杜甫

昔聞く洞庭の水 今上る岳陽樓
 吳楚東南に圻け 乾坤日夜浮ぶ
 親朋一字無く 老病孤舟有り
 戎馬関山の北 軒に憑つて涕泗流る

昔から洞庭湖の眺めの素晴しいことを聞いていたが、今初めてここに登り、噂どおりであることを知った。楼上から眺めると呉と蘇の地都は東と南に裂き別れて、果てしなく広がっており、この広大な洞庭湖の水面には、天地の全てのものが昼も夜も、その影を映している。

湖ではないけれど、深い自然にかこまれてこの漢詩を吟ずると、同じ心になれたようなそんな気持ちになつてしまう。

吟声が、まわりの木々に草々に沁み、そして天空に消えていった。清々しくも素晴らしい経験。

お昼ご飯は、ひやむぎ、野菜サラダ、野菜のテンブラ。トリの唐あげ。

メニューも支度も、全て先輩がして下さいました。丁寧に素材につきあつておられるのを学ぶのです。

車で上つてきた道を歩いてみたくなり、家に残る先輩に、細かく道を教わり、「皆でゆけば恐くない」と散歩に出掛けた。背丈より大きくなった野薊に近づく。暗緑色の大きな棘の或る葉つ

ばにさわつてみる。紅紫色の花の構造におどろく。アルゼンチンでは、牛達が太木のような薊を食べるといふけれど、棘はどうするのだろう。朝鮮薊という、アーティチョークは、大きな薊の花が咲く前を食するのだけれど、私は、アーティチョークの季節がくるのが待ち遠しいほど大好きな食べ物なんです。野薊も、きつと美味しく食べられると思う。

段々田んぼに近付いて、お米が稔っているのにワクワクしてしまふ。田んぼの脇を小川（用水）が勇い良く流れてゆく。こんなに水が沢山あり、なんて豊かな土地なんでしょう。小川は千曲川へと合流するのだろうか。

アララギの垣根に住んでいる家を見つけた。山でなくては素直に育たない、というアララギの木が、あちこちに見られ、「良いな良いな」と思う。

こんなことして歩いていて、皆で迷子になった。探しても探しても、先輩の家に帰る道がみつからない。電波があまり届かない山の中から、先輩に助けを求めた。そして探し出していただいたのです。

帰らなければいけなくなった日、駅へゆく途中の「リストランテ フォルマッジオ」へ昼食に。こんなに清々しい空気のもと、絶対に美味しいと決めていたチーズの清らかさ。雑味のない、本当の味だけして。このチーズに出逢えたことを感謝する。

沢山の「素晴らしい」をしつかり心にもつて、先輩ありがとうございました。詩吟クラス、ありがとうございました。

編集室だより 二〇一六年八月

○三河アララギ誌、九月号の表紙「ハカランダ」の花の散り敷く絵を描いていて、この可憐な淡紫の花と、ブエノスアイレスでの生活を思い出していた。ハカランダの冬木は、春の息吹とともに淡紫の花を、一木満して咲く。日本の染井吉野の満開のように、淡紫のハカランダの満開。ブエノスアイレスの街は、天も地も、この花の色と化してしまふ。

花の季は、朝から晩まで、ハカランダと遊ぶ。地に座り込んで、落花をひと花ひと花ひと花ひと花描いてゆく。すっかり親しくなつて自身もハカランダになつてしまつたように。

ボランディアで出掛ける熱海の海岸縁に、幾本かハカランダの木がある。私にとって、不思議なことに、花が葉と一緒に咲くことが、少し残念。栽培環境によるのだそうだ。

スペイン語は、Jの発音が、JAPON、JACARANDAであり、通説のジャカランダより私は、慣れ親しんだハカランダとアルゼンチン式で呼ぶ。

○漢詩実作、初心者入門講座に参加した。

第一回・漢詩概論。辞書の使い方。詩語表の見方。漢詩の規則。

第二回・韻について。起承転結。二行詩の実作。

第三回・和語、和臭について。日本人の好きな漢詩。四行詩

の宿題（春の詩）

第四回・四行詩の宿題（秋の詩を2題宿題）

第五回・卒業詩の宿題（自由題）

第六回・卒業発表会

何が何だか少しも理解出来ないのに、卒業詩は、こじつけ、無事提出した。

講評時、奨励賞として「新唐詩選」岩波新書をいただいた。とても興味深い本なので、続けて自作の漢詩をつくらう、と今は思っている。

○東京の住いの、家の前の坪庭に、隈笹が勢っていたのが大好きだった。なんだか白っぽくなったな！次の日、すじすじ葉脈だけになった。玄関のドアを明けて驚いた。うごめく毛虫の土手ほどが、私の玄関をとりまく。隣の家が同じ被害故、協力して下さった。三日間ほど、毛虫攻めは続いた。

○詩吟クラス。

・後夜仏法僧鳥を聞く

・名槍日本号

・胡隠君を尋ぬ

・短歌

・俳句

空海

松口月城

高啓

○迎賓館・赤坂離宮へ吟行。

学生時代、ここが国会図書館であった頃、友人が働いていて、よく出入りしていた思い出の場所。外国へ行っている間に、図書館ではなくなっていた。

○新宿ゴールデン街の「花の木さん」より、「ソーメンを食べる会」に来ませんか。「大好きな彼女に、美味しいソーメンをご馳走したい」という方がいて、そのソーメンが沢山あり、余ってしまったと、勿体ない。だから集まって「ソーメンを食べる会」。

○プリンスミュージシャン・マルチ・インストウルメンタリスト・シンガー・ソングライター。作曲家・音楽プロデューサー・俳優。プリンスのつくりだすリズムが大好き。男でもない、女でもない、偶像でもない、心のなかに「ほの」といる。こういう存在感が大好き。

○ルノワール展。国立新美術館（乃木坂）へ行く。長い、本当に長い間、一方的、片想いをさせていただいている。気心知れたような安心感は私のもの。南仏、カーニユの丘、ルノワールのアトリエを訪ねた日のことを思い出す。彼のアトリエのイーゼルに、描きかけの絵があった。彼が座っていたくぼみの残る椅子には、彼はいなかった。

○麻布十番「しも井野菜居酒屋」でディナー。野菜の「おさしみ」。キャベツ、紅大根、白大根、カボチャ、パプリカ、ルッコラ：みんな、薄切の生。「田酒」の冷を片手に、二つの「野菜のまま」が伝ってきて、本当に良い。レタスと大根輪切りとクコとの、豚シヤブ最高。

○王子本町、無識庵・越後屋。とろろ、おくら、とんぶり、シヨウガ、ミヨウガ、コブ、ウストラ

の玉子、なっとう：こんなのが乗っかっている。ねばねばそば、とても良い。その他に、穴子天ぷら：だったり、稚鮎、鱧、茸：季節のひと品を添え、パーフェクト。

○サマソニック・東京会場、幕張メッセ。

多種、多様、長時間にわたるフェスティバル。幕張海浜公園会場。ビーチ・ステージ。マリン・ステージ。QVCマリン・フィールド。アイスランド・ステージ。レインボー・ステージ。ソニック・ステージ。マウンテン・ステージ。広大な敷地に、外国や日本や各々のアーティスト達のイベント会場があるから、移動をしなければいけない、するのも大変なこと。それでもせっかくだから全部に参加したい。こんなに楽しく、こんなに無我になれ、このイベントを考えたこと、なんと素晴らしい。

私も、出来る限りの会場の出来る限りのリズムにのって、出来る限りの、若い人達好みを食べる。年なんぞ、とってはられない。

○長野新幹線、あさま号に乗り、まず上田城へ。

心地良い風に吹かれて、心おきなくお城の様子を探り、時の移りを体感し、自身の思考に筋道をたてる。

先輩の山荘にて、詩吟修得合宿をする。

美しい空気、水、木々山々、美しい闇、美味、やさしさのなから自然に向かつて吟ずる幸せ。

野菜の花（4）

鈴木孝雄



○ デイル

セリ科の一年草。

西南アジアから中央アジア原産。

細い茎に細かく裂開した葉を互生。

種子、葉、を香味料や生薬にする。

黄色い30個ほどの小さな花の集合花が、直径30cm位の傘を開いたように、1mの高さに広がる散形花序はまさに打ち上げ花火。写真は花を上から観たものです。2年前、料理用にと思い栽培したハーブ。花は嬉しい余禄だったが、今は花が一番の楽しみになってしまった。

デイルは柔らかな羽根の形のような針状の葉ばかりでなく、花と種子もすべて利用される。いずれも爽やかな香りを持ち、生野菜サラダ、魚貝のマリネ、ピクルス作りなど料理用ハーブとして重用される。香りの成分はd-カルボン、リモネン、ピネンとフェランドレンなど。すっきりした爽やかさは、ミントよりも香りの鼻腔での滞留時間が長く感ずる。

英名はデイル（Dill）で、和名イノンドであるが、今は日本でも一般にデイルと呼ばれる。原産地は地中海沿岸部とロシア南部とされている。非常に古くからハーブとして、エジプトでは少なくとも5,000年前には利用されていた。新約聖書にはパリサイ人がデイルなどで税を納めている記述がある。日本には江戸時代に伝来し、時蘿(じら)という生薬として利用された。現小石川植物園の前身である麻布御薬園（1638年創始）で栽培されていた。

デイルには、胃腸の機能を高め、駆風、口臭予防、女性特有の悩みを改善する効果及び安眠効果があり、大変有用な薬用植物でもある。

アメリカでは、主に種子から精油を作るためにデイルが栽培され、アロマオイルとして利用される。

次回はコマツナの花の予定です。

お知らせ

△十一月号の原稿は、九月三十日（金）までに、必着、郵送ください。

※毎月々の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。

郵便の休配（日曜、祝日）を考え、早目に送付して下さい。

※原稿の返却を希望される方は、毎月々の原稿に返却希望とお書き下さい。

三河アララギ誌発送に同封します。

▽原稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A

〒一四一〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰（20字×10行）を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

「三河アララギ」について

◇三河アララギ誌・毎月発行。

◇会員・今まで会員の方。希望される方。

◇会費制・廃止。既納会費は返却致しません。

◇これから講読を希望される方。一ヶ年分、四千円。振替口座〇〇八三〇一六―五六二二九。

◇会員、会員以外の方に執筆をお願いすることがあります。

◇短歌・俳句・論文・随筆など送稿することができます。

◇発行所開催の諸行事にどなたも出席出来ます。

◇三河アララギ発行所・〒一四一〇〇二二

東京都北区王子本町一―二六―六A

TEL・(〇三)五九二四―二〇六五

◇URL・E-mail yurimaizumi@jcom.zaq.ne.jp

Homepage <http://maizumiyuri.jp/>

◇編集・発行・今泉由利・森岡陽子

◇印刷所・株式会社 桜創美